

介護福祉実習に対する学生の意識と課題

尾台安子

Yasuko ODAI

山下恵子

Keiko YAMASHITA

抄録

介護福祉士養成教育における介護福祉実習は、学生にとって大きな学びをもたらすものであり、主体性を養う場でもある。また、利用者との人間関係を通して、自らの介護観を形成し、介護の専門性を体験する場である。しかし、実習が学生にとってやりやすい体制になっているかという点、必ずしもそうではない。そこで、今後の実習体制作りをしていきたいと考え、アンケート調査を行った。

本調査から、実習に消極的であった学生は、介護の仕事に迷いが生じやすく、不適応を起こしやすい存在であることがわかった。実習のやりやすさは施設側の対応に大きく影響を受けており、担当指導者の有無、職員全体の実習の受け入れ体制と理解、雰囲気等に左右される。また、実習の充実感とやりにくさとの関係では、施設側の指導体制、受け入れ体制などが大きく影響していることがわかった。教員側への要望としては、指導内容の不統一さを指摘された。これらのことから、学生の自主性を高め、やる気を阻害しないように、今後施設との連携調整を今以上に深めていくことが重要である。また、教員間において指導内容や教育方法についてカンファレンスをもち自己の教育力を挙げていくことが必要である。

キーワード：

介護福祉実習 実習指導体制 実習の充実感 実習指導者 学生の自主性

はじめに

介護福祉士養成教育における介護福祉実習（以下実習とする。）の意義と役割は多大である。実習は学内の専門基礎科目や教養科目等の講義や演習で学んだ知識の統合を図り、利用者との人間的な関わりを通して自らの介護観を形成し、利用者のニーズや日常生活上の課題に沿ったアプローチの方法や技術を身につけていく。いわば実習は介護の専門性を体験する場である。然しながら、実習はさまざまな課題を抱えている。実習施設の指導体制、施設指導者や巡回指導教員間の指導内容の共有化、指導力の問題、巡回指導に要する時間不足、教員の巡回の負担、効果的な実習指導のあり方等多くの課題を抱えつつ実施されている。

今回は実習を行なう学生に焦点をあて、実習に対する意識、実習の効果性、実習指導体制のあり方等についてアンケート調査を試みた。そこで今後の実習指導体制を整えていくための課題が明確になったので報告する。

1. 調査方法及び調査対象

介護福祉実習を修了した平成15年1月の実習指導の時間内にアンケートを配布し、直接回収する。対象者は2年課程の学生83名、1年課程の学生11名、合計94名

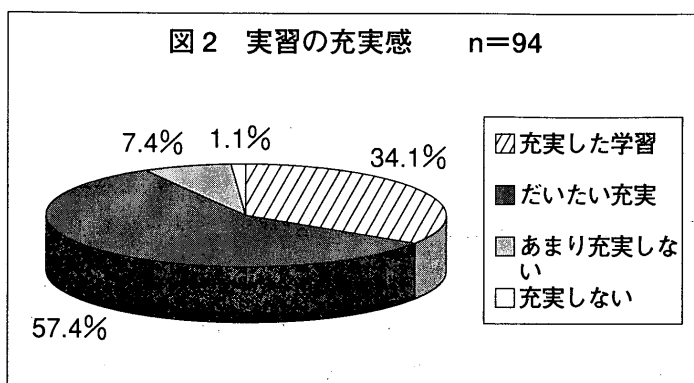
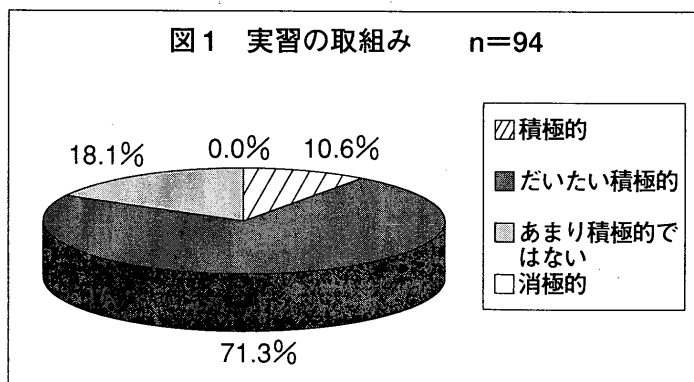
2. 調査内容と分析方法

調査にあたっては、実習課題への取組み、実習指導のあり方、実習で学んだこと、実習中で困ったこと、辛かったこと、楽しかったこと、改善してほしいこと等を想定した選択技法と自由記述を組み合わせて行った。内容としては実習全体を通しての振り返りとして、①学生自身の実習に対する姿勢 ②実習と授業の関係 ③実習施設の指導体制 ④本学の指導体制 ⑤その他とした。分析にあたっては、HALBAU(ver5.34)を使用した。実習に対する姿勢を、積極群と消極群にわけ、実習の充実感、実習課題への取組み、実習全体に対する意識との関係をカイ2乗検定してみた。また、実習のやりやすさの要因、やりにくさの要因を明らかにした。

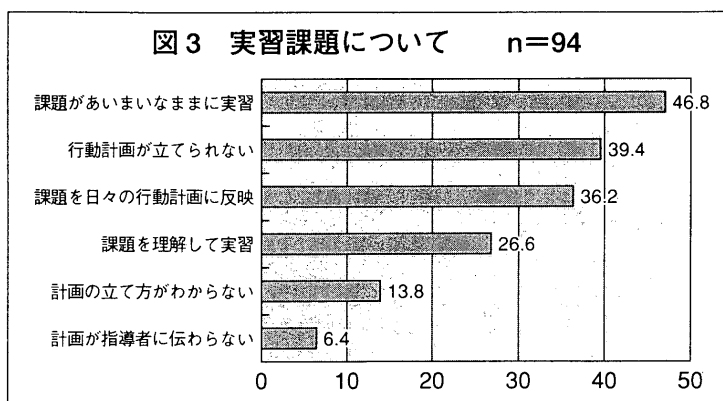
3. 結果と考察

(1) 学生自身の実習に対する姿勢

実習の取り組みは、積極的に取り組んでいた学生が81.9%おり、充実した実習ができた学生は91.5%であった。このことから実習自体は学生の姿勢としてよい取り組みができています。



実習課題については、各期の実習課題を理解して実習に望んだ学生が26.6%と、意外に少なかった。そのため課題があいまいであるため、日々の行動計画に活かすことができていない。また、「日々の行動計画がうまく立てられなかった」学生が48.9%おり、「立て方がわからない」とするものも13.8%であった。



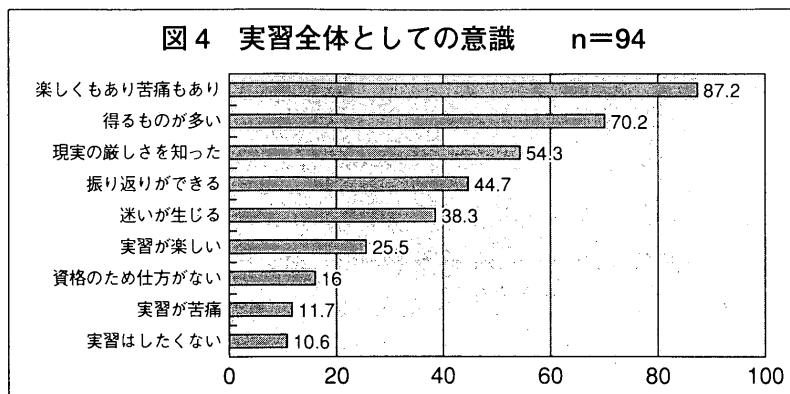
さらに、実習に対する姿勢を積極群と消極群とに分けて、実習課題との関係を調べてみたところ、消極群は日々の課題があいまいなまま実習を行っており、積極群は課題が日々の行動目標に反映できていることがわかった。このことは、学生に実習課題を十分に認識させることが重要であり、1回のオリエンテーションの中で確認するのでは不十分であり、各期の実習に向けての実習指導の中で繰り返し認識できるようにしていかなければならない。自由記述からは、行動計画の立て方について、指導教員間の考え方、書き方の不統一が指摘され、また施設指導者との共通理解が必要であることが明確になった。

表1 学生の積極性と実習課題との関係

	積極群 (%)	消極群 (%)
課題を理解し臨めた	23 (29.9)	2 (11.8)
課題があいまいのまま	31 (40.3)	13 (76.5) *
日々の行動目標に反映できた	32 (41.6)	2 (11.8) *
行動計画が立てられない	27 (35.1)	10 (58.8)
計画が指導者に伝わらない	4 (5.2)	2 (11.8)
計画の立て方が分からなかった	8 (10.4)	5 (29.4)

*p<0.05

実習全体を通しての意識は、非常に得るものが多かったとする学生が70.2%であり、実習は楽しい時もあり苦痛に感じるときもあると答えている学生が大半を占めていた。



学生の積極性と実習全体の意識との関係を見ると、消極群においては「介護の仕事に迷いが生じた」という項目に有意差が見られた ($p < 0.05$)。また、実習があまり充実していなかった学生 (8.5%) との関係を見ると「実習はできればしたくない」との間に有意差があった ($p < 0.05$)。実習の充実感の低い学生は、実習への取り組みが逃避的になっている。

表2 学生の積極性と実習全体の意識との関係

	積極群 (%)	消極群 (%)
苦痛であった	8 (10.4)	3 (17.6)
楽しかった	22 (28.6)	2 (11.8)
資格を取るため仕方がない	13 (16.9)	2 (11.8)
楽しくもあり、苦痛でもあった	65 (84.4)	17 (100.0)
厳しさを感じた	43 (55.8)	8 (47.1)
介護の仕事に迷いが生じた	25 (32.5)	11 (64.7) *
得るものが多かった	20 (26.0)	8 (47.1)
自分の振り返りができた	35 (45.5)	7 (41.2)
できればやりたくない	7 (9.1)	3 (17.6)

* $p < 0.05$

実習に消極的な学生や充実感の少ない学生は、介護福祉を学ぶことに不適応を起こしやすい存在であるといえる。実習に対して消極的な学生は、早い時期からサポートしていく必要があることがわかった。

学生の積極性と実習の充実感とは有意差が見られなかった。

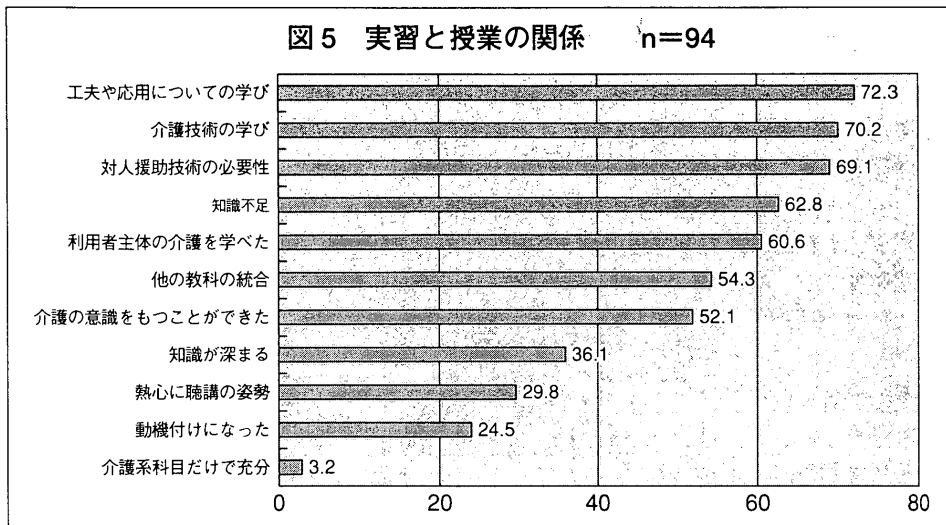
自由記述の内容は、実習期間、各段階の実習課題、記録類の多さに対する不満、ケアプランに関すること、施設の指導体制について、現実の介護のギャップについて、自分自身の振り返り、学べたこと等について、4割の学生が書いてあった。実習記録の書き方については、実習指導内容の工夫をして理解を深めていくことが必要である。ケアプランを立案して実践するという介護過程を学ぶにあたっての実習期間や時期については今後検討を重ねていきたい。施設指導体制に関することは、今後打ち合わせを密接にし、相互理解を深め、学生が生き生きと実習できる環境作りをしていかなければならない。

(2) 実習と授業との関係について

実習と他の授業との関係を見ると、「実習は他の教科の統合」と感じた学生が54.3%と半数しか認識できておらず、「実習は介護系の科目だけで十分」とする学生が若干いた。このことは実習が介護業務中心になってしまいがちな面が、まだあることが影響していると考えられる。

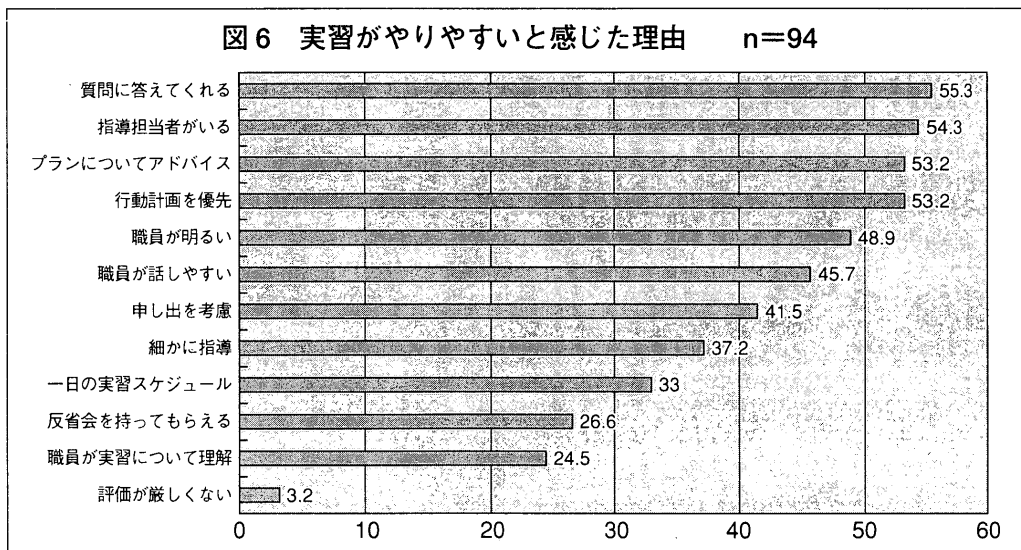
また、「実習が介護福祉を学ぶ動機付けになった」学生が24.5%と意外に少なかった。しかし、「介護に対する自分なりの意識をもつことができた」が、52.1%であることから意識付けにはなっていた。知識不足や対人援助技術の必要性を6~7割の学生が感じていた。

自由記述内容からは、「授業は表面的、平面的な知識であり、実習でそれが立体的になった。」「授業で勉強することが実習にどう役立つのかわからなかったが、実習にでてその必要性が理解できた。」等の授業との関係がとらえられていた。今後は、実習を有効に行なうことができるように、各教科で学んできた知識の幅を増やし、科学的な裏づけがもてる指導が、巡回指導の中で必要になってくる。



(3) 実習施設の指導体制について

実習のやりやすさでは、71.7%の学生がやりやすかったと答えている。



やりやすと感じた理由としては、「指導担当者が決まっている」「質問に丁寧に答えてもらえる」「行動計画を優先してもらえる」「プランについてアドバイスがもらえる」などであった。また、自由記述内容からは、質問に答えてもらったこと、細かに指導を受けたこと、職員の明るさや話しやすさ、学校側と施設との連携により職員が実習内容を理解されていたこと等がやりやす大きな要素になっていた。

実習のやりやすさとその要因との関係を見ると「評価が厳しくない」以外の11項目とに有意差は見られた。「指導担当者が決まっている」「行動計画を優先的に実践できる」「質問に丁寧に答えてくれる」「職員全体が明るい」の4項目はp値が0であった。実習のやりやすさは指導者を含めた施設職員の対応が大きく影響していることがわかった。

表4 実習がやりにくかった群の要因との関係

	やりやすかった群(%)	やりにくかった群(%)	p値
担当指導者がいない	6 (9.0)	10 (37.0)	0.00293 **
一日の実習スケジュールがない	10 (14.9)	7 (25.9)	0.33823
指導者がいない時が多い	10 (14.9)	12 (44.4)	0.00528 *
職員が忙しそうで声がかげにくい	20 (29.9)	21 (77.8)	0.00006 **
施設ごとで実習指導体制が違う	14 (20.9)	8 (29.6)	0.52494
実習について職員に理解されていない	9 (13.4)	12 (44.4)	0.00277 **
行動計画を申し出てもやらせてもらえない	1 (1.5)	2 (7.4)	0.4078
人によって指導が違う	28 (41.8)	19 (70.4)	0.02264 *
指導担当者についても放っておかれる	13 (19.4)	17 (63.0)	0.00012 **
職員全体が実習について理解していない	13 (19.4)	14 (51.9)	0.0038 **
質問に答えが返ってこない	5 (7.5)	5 (18.5)	0.22884
各期の実習課題が理解されていない	3 (4.5)	3 (11.1)	0.46895
反省会を持ってもらえない	13 (19.4)	5 (18.5)	1
評価が厳しい	5 (7.5)	3 (11.1)	0.86885

*p<0.05 **p<0.005

実習の充実感とやりにくさの要因との関係では、「施設ごとで実習指導体制が違う」「反省会を持ってもらえない」「質問に答えが返ってこない」ことが、充実感に大きく影響していることがわかった(p<0.005)。その他「担当指導者がいない」「指導者がいないときが多い」「行動計画を申し出てもやらせてもらえない」とで、有意差がみられた(p<0.05)。

表5 実習の充実感とやりにくさの要因との関係

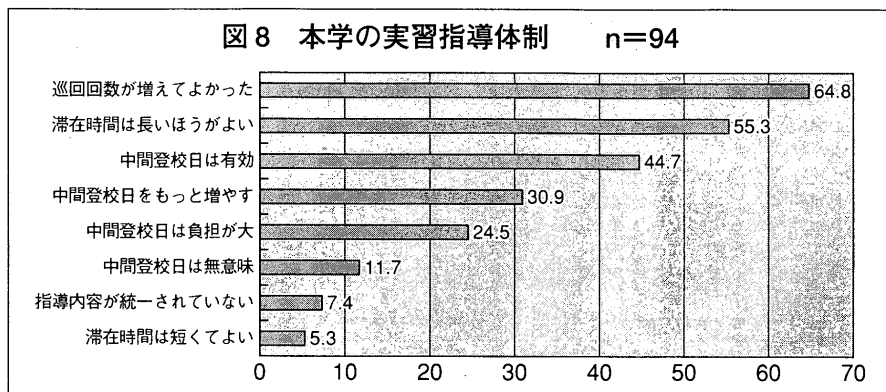
	充実群(%)	充実していない群(%)	p値
担当指導者がいない	12 (14.0)	4 (50.0)	0.03546 *
一日の実習スケジュールがない	14 (16.3)	3 (37.5)	0.31181
指導者がいないときが多い	17 (19.8)	5 (62.5)	0.02179 *
職員が忙しそうで声がかげにくい	35 (40.7)	6 (75.0)	0.13396
施設ごとで実習指導体制が違う	16 (18.6)	6 (75.0)	0.00154 **
実習について職員に理解されていない	17 (19.8)	4 (50.0)	0.12853
行動計画を申し出てもやらせてもらえない	1 (1.2)	2 (25.0)	0.00886 *
人によって指導が違う	41 (47.7)	6 (75.0)	0.26747
指導担当者についても放っておかれる	25 (29.1)	5 (62.5)	0.12265
職員全体が実習について理解していない	23 (26.7)	4 (50.0)	0.32608
質問に答えが返ってこない	6 (7.0)	4 (50.0)	0.0015 **
各期の実習課題が理解されていない	4 (4.7)	2 (25.0)	0.13465
反省会を持ってもらえない	12 (14.0)	6 (75.0)	0.00019 **
評価が厳しい	6 (7.0)	2 (25.0)	0.27788

*p<0.05 **p<0.005

施設指導体制と職員の対応が学生の充実感にも影響を及ぼしている。また、その日の反省会を持ってもらうことが充実感に影響していることがわかったので、反省会を持ってもらえるよう徹底していきたい。

(4) 本学の実習指導体制について

本学の指導体制については、5割以上の学生が「巡回回数を増やしてほしい」「滞在時間を長くしてほしい」という希望を持っている。中間登校日を設けてアセスメント指導を行なっているが、約半数の学生はその有効性を認めている。100人近い学生を一堂に集めて指導するには、十分な指導が全員にできない面があり今後検討していく必要がある。自由記述からは、ゆとりを持ってきてほしい、ケアプランについてのアドバイスをしてほしい等があげられていた。また、教員の指導力の差を指摘もされたので、教員間で学生に向き合う姿勢や指導力の向上のために、自己研鑽を積み、学生のもつ可能性を引き出し、専門職として介護に誇りが持てるような関わりをしていくことが重要である。



(5) 全体の自由記述から

自由記述の中で特筆するのは、医療行為に関する技術経験である。本学では今まであいまいなまにその場その場に対応してきたが、実習現場では学生が苦慮していることが明らかにされた。「経管栄養は医療行為であるため、やってみるかと言われたときに、見学を申し出たら、現場に出たら医療行為でもやらなければいけないんだ。見学といったからもうやらせないからと言われ、辛かった。」と率直な意見が書かれていた。今後養成校としての姿勢が問われてくるので、早急に検討し、方向性を明確にしていかなければならない。

また、一生懸命にやっというとしていたのに、「忙しそうで言葉がかけにくかったり、何をしてもよいかわからず職員のくるのを待っていたら、消極的だといわれてしまった」「遅いから早くやるといわれショックだった。」「少しでも手が止まっているとサボっていると思われてしまう」「職員と同じ行動をするように求められてもできない。」など、学生ならではの感想が述べられていた。

利用者とはよい関係づくりができ、実習が楽しいものになっていることがうかがえたが、実習の第1週目は、施設の流れや職員に慣れることで精一杯であり、その時期がかなり辛いものになっているのがわかった。1週目の巡回にはこのことを考慮してあたる必要がある。

4. まとめ

学生の実習に対する取り組みとしては、大半の学生が積極的に取り組んでおり、充実した実習になっていた。しかし、実習に対して消極的な学生は、介護福祉を学ぶことに対して不適応を起こしやすいので、第一段階実習の早い時期に把握して、サポート体制を整えていくことが必要になる。実習でのつまづきを、介護福祉士として育つ芽を育み、学生自身の成長につなげていくこ

とが大切である。

実習施設の指導体制については、7割の学生がやりやすいと感じており、施設側の指導体制が整えられてきている。実習のやりにくさの要因には、職員の忙しさ、職員の実習に対する無関心、指導担当者の不在、実習施設ごとの指導体制の違い、学生の自主的な行動計画が実施できないこと、人によって指導内容が違うこと、反省会を持ってもらえないこと、担当指導教員の指導内容の不統一などがあげられた。実習の充実感ややりやすさは施設側の対応に大きく影響を受けることがわかった。現在週2回の巡回指導を行っているが、施設との事前打ち合わせも行い、施設との連携と調整をさらに深めて、実習課題の共有化を図るとともに、指導者及び担当指導教員間で、学生を育てるという共通理解を図っていくことが重要である。また、各期の実習課題の意識付けをした実習指導のあり方や記録類のねらいや考え方の統一と書き方の指導の必要性が示唆された。学生の意欲を阻害しないように、より充実した学び多き実習にしていくために実習施設側とともに指導体制を整えていかなければならない。

実習教育は、教員と学生、学生と施設指導者、教員と施設指導者の双方向の学習が行われて、三者間の信頼関係の上に成り立つものである。

参考文献

澤田信子他：介護実習指導方法 全国社会福祉協議会 2003年

吉田宏岳監修：介護福祉実習 みらい 2000年

日本介護福祉士会監修：介護福祉士実習指導マニュアル 中央法規出版 2000年